

釈論大江千里集（十二）

小 半 はん
池 沢 ざわ
博 幹 かん
明 一 いち

〔前説〕

本稿は、次に示すものの続稿である。

「釈論大江千里集（一）（二）（四）（六）（八）（十）」（『長野工業高等専門学校紀要』五一号～五六号、二〇一七年～二〇二二年。いずれも電子版のみ）および「釈論大江千里集（三）（五）（七）（九）」（『共立女子大学文芸学部紀要』第六五集～第六八集、二〇一九年～二〇二二年）

今回は、秋部の四一番歌～四五番歌の五首を取り上げる。

本釈論全体の目的と意義の詳細、凡例や参考文献などについては、「釈論大江千里集（一）」を参照されたい。

〔釈論〕

樹葉霜紅日（樹葉、霜、紅なる日）

四一 つねよりも秋のこのはにおくしものくれなゐふかくみゆるころかな

【通釈】

例年よりも、秋の木の葉に置く霜が、紅濃く見えるこの頃であるなあ。

【語釈】

つねよりも 万葉集には見られず、「つねよりもはやくもみちはしらつゆのわきて心をおけるとやみん」（本院左大臣歌合・一五）、「つねよりもどけかるべき春なればひかりに人のあはざらめやは」（後撰集・三・春下・藤原実頼・一三六）、「つねよりもおきうかりつる暁はつゆさへかかる物にぞ有りける」（後撰集・十三・恋五・九一三）のように、古今集時代以降に見られるようになる。「つね（常）」は変わりない状態を表わし、「つねよりも」という表現は基準となる普通と比べてということの意味する。その「普通」は、当歌の場合、例年の秋（の同じ頃）であろう。

秋のこのはに 「秋のこ（木）のは（葉）」という句は、万葉集に見えないが、古今集に「白露の色はひとつをいかにして秋のこのはをちぢにそむらむ」（古今集・五・秋下・藤原敏行・二五七）、「吹く風の色はちくさに見えつるは秋のこのはのちればなりけり」（古今集・五・秋下・二九〇）、「竜田ひめたむくる神のあればこそ秋のこのはのぬさとちるらめ」（古今集・五・秋下・兼覽王・二九八）、「白浪に秋のこのはのかべるをあまのながせる舟かとぞ見る」（古今集・五・秋下・藤原興風・三〇一）のように、いずれも秋歌下に四首も見られる。しかも、二五七番歌が是貞親王家歌合（詞書による。ただし、現存伝本には載らない）、三〇一番歌が寛平御時后宮歌合にあり、是貞親王家歌合には、「からにしきみだるのべとみえつるはあきのこのはのふるにざりける」（是貞親王家歌合・三四）もあることから、本集成立の頃には類型化していた句であろう。挙例からも明らかのように、「秋の」を冠した「木の葉」と言えは、紅葉のことになる。

おくしもの 「おくしも（置く霜）」については、三七番歌【語釈】該項を参照。句末の格助詞「の」は下接の「くれなゐ」を修飾する連体格とすることもできるが、「くれなゐふかく」の連語性に重きを置き、結句の「みゆる」に対する主格とみなしておく。三七番歌では、霜は草葉を枯らすものとして詠まれているのに対して、それとは別に、紅葉を促す原因としても詠まれる。紅葉を促す霜は、霜枯れほど多くはないものの、「霜のたてつゆのぬきこそよわからし山の錦のおればかつちる」（古今集・五・秋下・紀関雄・二九一）、「風のもむこず糸の色はくれなゐはしものおくにぞ色まさりける」（安法法師集・六三）、「はつしものおかぬだにこきもみぢばのそのさか

りをばたれにみせまし」(重之集・二四)などの例がある。当歌の場合、下句との関係から見れば、草葉を枯らす霜とはとれないといえ、紅葉を促す霜とも明言しがたい。異本系書陵部桂宮本の「おく霜に」のように、格助詞「に」をとるならば、それと認められるのであるが。この点、なお【補注】参照。

くれなゐふかく この句については、二八番歌【語釈】「くれなゐふかき」の項を参照。二八番歌の「くれなゐ(紅)」は蓮花の色をいうが、当歌では、紅葉に關している。紅葉の色は「ちぐさ」や「ちぢ」とも形容されるように、さまざまであるが、とくに紅色とするのは、有名な「ちはやぶる神世もきかず竜田河唐紅に水くくるとは」(古今集・五・秋下・在原業平・二九四)の他にも、「しぐれの雨間なくな降りそ紅に(紅尔)にほへる山のちらまく惜しも」(万葉集・八・一五九四)、「もみぢばのながれてとまるみなとには紅深き浪や立つらむ」(古今集・五・秋下・素性・二九三)など、万葉集から見える。「くれなゐ」は、本集の好む語で、五例(二八・四一・四四・四八・九二)ある。そのうち、四一・四四・四八が紅葉の色。「くれなゐ」の用例数は、古今集七例、後撰集四例、拾遺集五例であるから、割合では格段に本集が多い。

みゆるころかな 「みゆ」は詠み手の視覚的な判断を表わし、当歌では、「あきのこのはにおくしも」を対象として、それが「つねよりも」「くれなゐふか」と判断していることになる。留意すべきは、紅深く見えるのは秋の木の葉ではなく、それに置く霜としている点である。【補注】参照。「ころ」はこのころ、すなわち今を中心とした、限られた時間の範囲である(大野晋『古典基礎語辞典』参照)。終助詞「かな」は、詠み手がそのように判断したこのころに対する詠嘆の意を表わすが、その理由は、例年の秋の同時期とは異なっている点にある。この句は、用例のほぼすべてが、「あしまわけゆくみづくぎにあらなくによどみがちにもみゆる比かな」(古今六帖・五・日ごろへだてたる・二七七二)、「かくれぬにおひたるあしのうきねしてはつれなくみゆるころかな」(斎宮女御集・一四四)などのように、結句に置かれるという点で、類型化している。当歌は、その嚆矢のようである。

【補注】

【語釈】でも触れたように、表現上、「くれなゐふかくみゆる」のは、「秋のこのは」ではなく、それに「おくしも」である。全釈も「底本の本文によると霜で紅葉するのではなく、より紅が濃くなった葉を通して霜も濃い紅に見える、と解釈できる」と補説している。問題は、霜が紅に見えるとはどういうことか、である。

当時は、霜は露の変化したものと捉えられていたが、露に「白露」という複合語があるのとは違って、「白霜」はなく、その色が直接示されることはない。ただ、たとえば、「ありつつも君をば待たむうちなびく我が黒髪に霜の置くまで」（万葉集・二・八七・磐姫皇后）のように、白髪を想起させることから白色と捉えられていたことはいかがえよう。

また、露についてであるが、「白露の色はひとつをいかにして秋のこのはをちちにそむらむ」（古今集・五・秋下・藤原敏行・二五七）のように、紅葉の多色に対して、露の白という単色が対比されるのであるから、露のみならず、霜が紅色に見えるというのは、きわめて考えがたい。

じつは、そこにこそ千里のあえての眼目があつたと考えられる。つまり、霜と紅葉の作用関係を逆転させたのである。普通は、霜が木の葉を紅くすると詠まれるところを、逆に、木の葉のほうが白い霜を紅くするとみなしたのである。

全釈は、「より紅が濃くなつた葉を通して霜も濃い紅に見える、と解釈できる」と、あたかも囑目詠のように補説するが、「葉を通して」という設定は成り立ちえまい。実際に、木の葉に置く霜も紅く見えるということではなく、いかに「紅」葉が色鮮やかであるかを強調するために、作用関係を逆転させてみたのである。

なお、赤人集に、「つねよりもあきのこのははおくらんにくれなゐふかくみえわたるかな」（六六）として載り、和歌文学大系本では、第三句を「おくしにも」と改めてある。

【比較対照】

原拠詩は、次に挙げる、白氏文集の五言律詩「答夢得秋日書懷見寄」（卷第六十四・三〇九七）であり、句題は頸聯の第一句による。当詩において、秋部の句題としては、当句がもつともふさわしいであろう。

幸免非常病 幸ひに非常の病を免れ、

甘当本分衰 甘んじて本分の衰に当たる。

眼昏燈最覚 眼の昏きは、燈、最も覚え、

腰瘦帯先知 腰の瘦せたるは、帯、先づ知る。

樹葉霜紅日 樹葉、霜、紅なる日、

髭鬚雪白時 髭鬚、雪のごとく白き時。

悲愁縁欲老 悲愁は老いむと欲するに縁る、

老過却無悲 老い過ぐれば却つて悲しむ無し。

右の訓読は新釈漢文大系に従ったものであるが、その通釈は、「木の葉に霜が下りて紅く色づく秋になると」とある。しかし、その訓みどおりに解釈すれば、「樹葉」と「霜」は並列関係となるはずであり、頸聯における対句関係を見れば、雪の白さと対比されるのは、霜の紅さになるはずである。全釈も、「樹葉霜に紅なる日」と訓じ、補説とは異なり、霜によつて紅葉すると解しているようである。

どちらも漢詩あるいは和歌における、紅葉と霜の關係の一般的な捉え方をふまえた解釈であろう。千里はそのことを十分に承知しつつも、だからこそ、むしろ原挾詩の頸聯における対句關係を生かして、樹葉が「霜のごとく紅なる日」のように、逆転的に發想・展開したと推測される。このような逆転的な發想は、当詩の頷聯における、「燈」や「帯」を擬人的に主体とした表現にも認められる。

もとより霜が紅いということはありえないのであつて、雪が白いというのとは訳が違う。当詩の頸聯の主題はあくまでも「樹葉」と「髭鬚」であり、その色が対比されているのであつて、「霜」と「雪」はその形容にすぎない。それを当歌はさらに、「秋のこのはにくしも」という表現にすることにより、霜のほうに焦点を置くようにしたのである。

なお、当歌全体としての主題は、結句の「みゆるころかな」とあるとおり、秋の深まりを感じさせる時期にあると言えるが、当詩全体の主題はそもそもそこにはない。このような主題の転移は、本集の他の歌にもしばしば見受けられることである。

蕭條秋思苦（蕭條たり、秋思の苦しみ）

四二 かすかなるときのみみゆるあきしものはものおもふことぞくるしかりける

【通釈】

物寂しい時間が感じられるばかりの（秋、という語の付く、旅先の）秋篠にあつては、物思いにふけることが苦しいことであるなあ。

【語釈】

かすかなる 「かすか」は、物事の状態の程度が低いことを表わす。和歌における用例は、万葉集にも八代集にもなく、本集よりおよそ百年後の成立と見られる私家集の千穎集まで見当たらない。同集には、「むもれぎのもりのしづくにはがくれてかすかにもなくうぐひすのこゑ」（千穎集・春・九）、「とりのみちわづかにかよふおくやまにいりあひのかねのかすかなるこゑ」（千穎集・心細・八三）、「やまぶしのおこなひごゑぞかすかなるみても見えずつめるしらゆき」（千穎集・心細・八八）と三例あり、どれも音声の聞こえの程度の低さをいう。平安時代後期頃からは、「くもまよいかすかにけぶりたつた山みねのあなたにすみやくらん」（為忠家初度百首・五四）
 ○・藤原顕広（俊成）、「はるはるとこしちにかへるかりがねのこゑもかすかにとほざかるなり」（教長集・一五四）、「しのはらやきりにまがひてなく鹿の声かすかなる秋の夕ぐれ」（山家集・四三八）と徐々に増え始め、為忠家初度百首歌のように、視覚についても詠まれるようになり、鎌倉時代になると、「ほたる飛ぶおぼろのし水かすかにもしらはやおのがもゆるころを」（続千載集・三・夏・津守国冬・三一六）、「短晷悠揚雲物冷、蕭条景色望方幽／たれかすむはやまがしたの秋風に煙とはるる道もかすかに」（拾遺愚草員外・六五五）、「秋のよも暁ちかくなりにけりややかすかなる窓のともし火」（宝治百首・藤原資季・三二五）などのように、いつそう詠まれるようになる。ただし、当歌のように、「とき（時）」を修飾する例は他に見当たらないし、「とき」に関して、その状態の程度を問題にすることも考えがたい。そこから、この「かすか」は、物寂しいさまを表わすと見られるが、その明らかな用例は、「いと心ほそうかすかにておはしますことを思ひつつ、いと悲しかりけり」（大和物語・二段）、「かのはなやかなる御仲らひに立ちまじるべくもあらず、かすかなる身のおぼえをといよいよ心細ければ」（源氏物語・宿木）など、散文には見られるが、和歌では、「妻こふる鹿のとごゑにおどろけばかすかにも身のなりにけるかな」（散木奇歌集・四四七）などがあるとはいえず、平安時代後期になって稀に見られるのみである。しかも、これらは人の様子に関してであつて、「時」という、より抽象的な事柄に関してではない。【比較対照】参照。
 ときのみみゆる 「とき（時）」は、時間一般を表わすだけでなく、限定的に、ある季節や時期として、それがちょうどふさわしい、あるいは盛りのタイミングであることも表わす。初句から続く「かすかなるとき」という表現における「とき」も、まさに「かすか」の

盛りの時節であることを、「のみ」という副助詞とともに示していると見られる。「みゆる（見）」は、当句の範囲だけで考えれば、時のみが見える、のように、「とき」を主語とする述語として位置付けられ、その関係で第三句の「あきしの」を連体修飾するとみなす。あきしのは「あきしの」に相当するのは、大和国の「秋篠」という地名であり、その意でとって当歌全体の解釈が出来なくはないので、本釈論の方針に従って、底本のままにしておく。蔵中校本によれば、流布本系「四月廿七日」（為忠筆）本系の大阪市立大学森文庫本（九一・一四八〇EC）に「あきしのは^{の夜}」、ノートルダム清心女子大（黒川家旧蔵）本（C二二・一一）に「あきしのは^{の夜}」とあり、異本系統書陵部蔵桂宮本は「秋のよは」とするが、流布本系の本行本文に「あきのよは」がなく、「あきのよ」の傍記もわずかに二本であり、大勢としては「あきしのは」の本文である。ただし、全釈は「誤写とみて」、「あきのよは」と改めてあり、赤人集も「あきのよは」になつていたり、「あきしの」と「あきのよ」では、「あきのよ」の用例のほうが和歌では圧倒的に多いということがある。しかし、「あきのよは」の本文を探ることの問題がなくもない。それは、「かすかなるとき」が「みゆる」が「あきのよ」を連体修飾するとしたら、秋の夜において「かすかなるときのみ」が感じられるという意となるのが不自然だからである。秋の夜そのものが時間を表わし、その時間を「かすかなるとき」とするならば、「かすかなるときのみこそみゆる」のように、格助詞「と」が補われなければならない。しかし、原則的に、格助詞「と」は「が」や「を」とは違って、省略できないのである。これが秋篠という地名ならば、そういう問題は生じない。歌枕「秋篠」は、現在の奈良県秋篠町。平城京の西北端に位置する。平安時代後期から見え始め、「あきしのはをりならずとやはるはただかすみのうちにたちかくるらん」（教長集・四三）、「あきしのや外山のさとや時雨るらん伊駒のたけに雲のかかれる」（新古今集・六・冬・西行・五八五）、「ながき夜のいこまおろしやさむからん秋しの里に衣うつなり」（壬二集・二四九三）などのように、秋と関わらせて詠まれる。のみならず、「しの」には、しっとり、しみじみの意を表わす語との重ね合わせも見込まれる。当歌はその逸早い先駆けになる。

ものおもふことぞ 「ものおもふ」は、物思いにふける、思い悩む、の意。三九番歌【語釈】「ものをおもふ」の項および【補注】参照。くるしかりける 助動詞「ける」は、第四句末の係助詞「ぞ」の結び。結句に「くるしかりけり」を置くのは、「人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり（辛苦有家里）」（万葉集・三・大伴旅人・四五二）、「みちのくに有りといふなるなとり河なきなとりてはくるしかりけり」（古今集・十三・恋三・壬生忠岑・六二八）、など、典型的に見られる。【補注】参照。

【補注】

本集には、三六、三九、四〇番歌のように、悲秋に関連する歌ではあるが、当歌は「秋」あるいは「かなし」という語を直接的に用いていないという点で、他とは異なる。ではなぜ悲秋に関連するかと言えば、部立や句題は別にしても、第三句の「あきしの」から秋が喚起されることや、物思いが募ることと悲しいという感情が結び付けられやすいことなどが挙げられよう。

当歌は、上句が提題部で下句が解説部となる、題述構文である。当歌のように、解説部に係助詞「ぞ」がある、「……は、……ぞ……」の構文は、よく見られる(二三番歌【補注】参照)。けれども、「苦しかりけり」を結句とする場合は、「こぬ人を雨のあしとは思はねどほどふることはくるしかりけり」(古今六帖・一・あめ・四八二)、「秋風のややふく野べのしのすすきほいでぬこひはくるしかりけり」(古今六帖・六・しのすすき・三七一三)のように、「……は、苦しかりけり」の構文が多く、「……は、……ぞ……苦しかりける」の構文をとることは稀である。

類例として挙げた歌では、「苦しかりけり」の主語が、係助詞「は」を下接してそのまま焦点化されるのに対して、当歌は、「ぞ」が解説部の叙述の焦点を示すから、眼目は「ものおもふこと」にある。つまり、当歌において、「かすかなるときのみみゆるあきしのは」という提題部は、「ものおもふこと」の場面設定を示すのであり、ただでさえ物寂しい時期と場所にあつて、という意味を表わしている。助動詞「けり」は、物思いの苦しさが殊の外なのは、そうした時期と場所だったからかという気付きの詠嘆を表わす。

なお、赤人集に「かすかなるときのみみゆるあきしよはものおもふことぞすくなかりける」(赤人集・六七)という、異なる本文で載る。

【比較対照】

原拠詩は、次に挙げる、白氏文集の五言律詩「社日関路作」(卷第十三・〇六五四)であり、句題は尾聯の第一句による。

晚景函関路 晚景の函関の路、

涼風社日天 涼風の社日の天。

青巖新有鷹 青巖に新たに鷹有り、

紅樹欲無蟬 紅樹に蟬無からむと欲す。

愁立駅楼上 愁へて立つ、駅楼の上、

厭行官堠前 行くを厭ふ、官堠の前。

蕭條秋興苦 蕭條たり、秋興の苦しみ、

漸近二毛年 漸く近し、二毛の年。

本集句題では「秋思」とあるが、原拠詩では「秋興」とある。ともに漢語として類義関係にあり、白氏文集にも両語とも用いられているが、続く「苦」との関係からは「秋思」のほうがふさわしいかもしれない。

表現上の関係としては、「蕭條」に「かすかなる」、「思」に「ものおもふ」、「苦」に「くるしかり」がそれぞれ対応しよう。このうち、「蕭條」については、観智院本類聚名義抄（正宗敦夫『類聚名義抄』風間書房 一九六二年）に、「カスカナリ」の訓があり、「蕭條」と同じく物寂しいさまを表わす語として「かすか」が用いられていたことがうかがえる。【語釈】に挙げた、千穎集の「かすか」の用例には、漢詩文受容の可能性が指摘されているが（金子英世『千穎集』の位置——初期定数歌との関係を中心に——）金子他『千穎集全釈』風間書店 一九九七年）、当歌の用例は、それに先立って、「蕭條」と「かすか」の対応を示すものと言える。

ただし、原拠詩における同句について確認しておきたいのは、「秋興苦」が「蕭條」であるわけではないということである。その関係を認めるとしても、あくまでも結果としてであって、全体に描かれているのは、冒頭句に示された「晩景の函関の路」から見える風景であり、それが「蕭條」なのである。

句題にあって歌に欠けているのは「秋」のみであるが、これは地名の「秋篠」の「秋」に掛けたのであろう。

歌で補われたのは、第二句と第三句の「ときのみみゆるあきしのは」であり、これほどのまとまりで補われるのは、本集では珍しく、しかも単なる具体化のためとも言えない、原拠詩の換骨奪胎が認められる。

まずは、秋篠という地名を持ち出した点である。原拠詩はその詩題にある「関路」すなわち函谷関を旅の途中で通り過ぎた時のことを歌ったものである。当歌は、旅先であることを、京から離れた秋篠に置き換えて示したのである。秋篠の地は後に、「あきしのや外

山のさとや時雨るらん伊駒のたけに雲のかかれる」(新古今集・六・冬・西行法師・五八五)と詠まれることにもなる、有名な古里ではあるが、他ならぬ、この地が選ばれたのは、「あき」の掛詞にするという事情があったのではないかと推測される。さらに言えば、「かすか」に、同じく大和の「春日」を縁付けているという見方も捨てがたい。

もう一つは、「かすかなる」ものを「とき」とした点である。原拠詩の詩題にある「社日」とは、立秋後の第五の戌の日をいい、秋の盛りである。しかも、その頃の、冒頭句にある「晚景」つまり夕暮れ時の景色である。原拠詩の「蕭條」は、先に指摘したように、その時の景色についてであるが、そのすべてのよって来たる所以を、そのような「とき」に見出したのが、当歌なのである。つまり、「かすか」の元は、個々の風物の変化ではなく、それをもたらす秋という「とき」にあるというように、当歌は他の句題と歌の関係とは正反対に、原拠詩の具体を離れた、その意味では観念的な作品に仕立て直してみせたのである。

悲秋縁欲老(悲秋は老いむと欲するに縁る)

四三 すぎてゆく秋のかなしくみえつるはおいなんことをしきなりけり

【通釈】

過ぎて行く秋が悲しく見えてしまうのは、きつと(自分も)老いるだろうことが、惜しいからなのだなあ。

【語釈】

すぎてゆく この動作の主体は次句の「秋」である。「すぎてゆく」は、「すぎゆく」と異なり、接続助詞「て」を介して、「すぐ(過)」と「ゆく(行)」が順次的動作であることを示す(二〇番歌【語釈】「ふりすててゆく」の項を参照)。「はるばると山のはすぎてゆく」と「すぎゆくあきといづれまされり」(忠岑集・一一四)では、「すぎてゆく」は、月が山の稜線を過ぎて、さらにその運行が続くことを表わし、「すぎゆく」は、秋が深まりつつあることを表わす。月が稜線を過ぎた後、没しつつあることは、現象としては「すぎゆく」と同じである。実際に、忠岑集の当該歌は書陵部本『躬恒集』では「すきゆく月」の本文であるという(藤岡忠美・片岡剛『忠岑集

注釈』貴重本刊行会 一九九七年)。忠岑集歌は、「て」を介して、「過ぐ」と「行く」とを別々の動作として、あたかもストップモーションのように表現したところに、作者の山の端にかかる月への愛惜が表出されている。当歌の「すぐ」は、秋の推移（深まり）を表わし、「ゆく」は「はるがすみたつを見すてゆく」かりは花なきさとにすみやならへる（古今集・一・春上・伊勢・三二）、「すがるなく秋のはぎはらあさたちて旅行く人をいつとかまたむ」（古今集・八・離別・三六六）のように、秋が詠み手のいる場所から離れる意。すなわち、「すぎてゆく」は、秋が深まり、そしていずれ過ぎ去るということである。なお、本集に「すぎてゆく」は当歌しかないが、「すぎゆく」は二例、いずれも春部に見られる（五・二〇）。

秋のかなしく 初句と、この第二句が連用修飾句として第三句「みえつるは」に係り、当句末の「の」はその主格であることを示す。過ぎて行く秋が悲しく見える、の意。漢語「悲秋」との関係については、四〇番歌および当歌の【補注】【比較対照】を参照。

みえつるは 「みえ（見え）」は、四二番歌【語釈】「ときのみみゆる」の項を参照。四二番歌同様、ここも一般化して、感じられるの意とすることもできるが、当歌の構文である、「……みえつるは、……なりけり」の用例からすれば、視覚的認識、すなわち「見える」という理解のほうが妥当であろう。「みえつるは」は、万葉集にはなく、当歌は、【補注】に示す是貞親王家歌合歌などともに、早い用例で、第三句にあることがほとんどである。

おいなんことの 「おゆ（老ゆ）」＋「ぬ」（助動詞）＋「む」（助動詞）＋「こと」＋「の」（格助詞）。間違いなく老いるであろうこと、の意。「おい」は、一二番歌【語釈】「おいぬる人の」の項を参照。「なん」は、「老ゆ」という成り行きを確信的に示す。形式名詞「こと」は、「おいなん」という状態を事柄として表わす。「おいなんこと」という句は、他に用例を見出しがたい。「うなんこと」は、わずかながら、「をしまれぬかたこそ有りけれいたづらにきえなむ事は猶ぞ悲しき」（和泉式部統集・四九五）、「はかなくもちりなんこと」ををしむかな花よりさきにきえぬべき身に」（行尊大僧正集・一七二）、「我も又ふりなんことのちかければながらのはしをよそにやはきく」（二条院讃岐集・七四）などの用例があり、ほとんどが老いに関係する語を上接することが注目される。そうした点から見れば、当歌はその早い時期の用例である。

をしきなりけり 全釈は、誤写とし、「おもふなりけり」（異本系の本文の採用と思われるが、それについては記されない）と校訂する。その理由は、「平安期に『老いる』ことを『惜しむ』という発想や表現はない。『惜しむ』のはすぎゆく『春』や『秋』などである」と

する。しかし、「をしみつる我がおいらくはさくら花かざしてのみぞをりわすれける」（書陵部藏御所本躬恒集・五二）、「我がせこがゆるがをしささだのいけのたまもにもがなかりあげはやさん」（古六和歌帖・三・いけ・一六六五）、「いけらじといふにしなぬ老の身ををしむにきゆる露ぞともがな」（為頼集・六六）、「おいゆけどをしけくもなし年の内に春にふたたびあひぬと思へば」（基俊集・五六）など、老いを惜しむ歌は、平安時代にあるのであるから、校訂の必要はあるまい。

【補注】

「なりけり」構文の一種である、「……見えつるは、……なりけり」は、「吹く風の色のちくさに見えつるは秋のこのはのちればなりけり」（古今集・五・秋下・二九〇）、「白雲のおりある宿とみえつるは降りくる雪のとけぬなりけり」（寛平御時后宮歌合・一四〇、後撰集に「白雲のおりある山とみえつるはふりつむ雪のきえぬなりけり」（八・冬・四八四）の本文で入集）のように、上句（提題部）で見立てを提示し、下句（解説部）でその種明かしをするという歌が多い。「みえつる」が見立てと相性がよいのは、本当は違うのが分かっているけれども、ついそう見えてしまうということを含意するからであろう。このような見立て構文は、提題部で視覚的に捉えられた見かけ上の謎について、下句でその真実を発見するという形で解説する体裁をとる。

とすれば、当歌も「すぎてゆく秋のかなしくみえつるは」には、秋が悲しく見えることについて、なぜそう見えてしまうのかという疑念が読み取れよう。それは、四〇番歌「おほかたのあきをかなしとみることに」に見られた、迂遠な言い方と同様、悲秋が和歌的実感として定着しきっていないことを示すとも言える。これは、「秋の夜のおくるもしらずなくむしはわがごと物やかなしかるらむ」（古今集・四・秋上・藤原敏行・一九七）、「打ちつけに物ぞ悲しきこのはちる秋の始をけふぞとおもへば」（後撰集・五・秋上・二一八）、「はかなくてくれゆく秋のかなしさをおもひしらするしかのこゑかな」（唯心房集・六九）などの、悲秋を明確に詠んだ、その後の歌と比較すれば、いっそう明らかである。一方で、古今集歌の詞書が、「これさだのみこの家の歌合のうた」（現存のは貞親王家歌合にはない）であることは、是貞親王家歌合の成立が本集とはほぼ同時期と推測されることから、まさに本集成立の時期が悲秋觀念の定着しつつあったことの証左ともなろう。

【比較対照】

原拠詩は、四〇番歌と同様に、白氏文集の五言律詩「答夢得秋日書懷見寄」（卷第六十四・三〇九七）であり、句題は尾聯の第一句

による。

幸免非常病 幸ひに非常の病を免れ、

甘当本分衰 甘んじて本分の衰に当たる。

眼昏燈最覚 眼の昏きは、燈、最も覚え、

腰瘦帯先知 腰の瘦せたるは、帯、先づ知る。

樹葉霜紅日 樹葉、霜、紅なる日、

髭鬚雪白時 髭鬚、雪のごとく白き時。

悲愁縁欲老 悲愁は老いむと欲するに縁る、

老過却無悲 老い過ぐれば却つて悲しむ無し。

原拠詩の当該句と本集句題とは、二字目が「愁」と「秋」で異なるが、両字は音も意味も通じ合う。詩題にも「秋日」とある。ただし、秋らしさを感じられるのは、頸聯第一句くらいであり、それが四〇番歌の句題に採られたのは自然であるのに対して、当歌の場合は、「悲愁」Ⅱ「悲秋」を前提としなければ、秋歌としてはみなされまい。しかも、原拠詩の主題は逆説的な、尾聯第二句にあるのであって、人生を季節にたとえるときも、秋ならではということにはならない。

そのような句を、なぜ千里は選んだのか。生没年が不詳なので、本集制作時点で、彼が老境にあった可能性もなくはない。とすれば、句題はあるにせよ、当歌には千里の実感が込められていると見ることができよう。先行する、本集の「秋のよのしもにたとへてわがかみはとしのはかなくおいしつもれば」(三五)という歌も、同様である。とはいえ、原拠詩とは異なり、「おいなんこと」という推量表現なのであるから、今後のことであって、現在のことではない。とすれば、その実感というのも疑わしい。

句題と和歌の表現上の関係としては、句題の「悲秋」は歌の初句と第二句、「縁欲老」は歌の第三句から結句までが相当し、ほぼそのまま移し替えていると言える。千里の工夫を認めるとすれば、歌で補われた、初句の「すぎてゆく」と第三句の「みえつる」である

う。

「すぎてゆく」は【語釈】でも説明したように、「悲秋」に示される、まるごとの秋ではなく、秋の時間的な推移を表現し、その推移を「かなし」と見ているのである。この見方は、漢詩的な観念とは違う、むしろ和歌的な惜秋の感慨である。その意味で、【補注】に説いたように、和歌ではまだその観念は定着以前であったことを物語っているとも言えるが、千里の有名な「月見ればちぢに物こそかなしければ身ひとつの秋にはあらねど」(古今集・四・秋上・一九三)という、明白な悲秋歌との先後関係は明らかではない。それはともかく、当歌においては、推移に対する感慨を、人間の老化という推移に重ね合わせたところに、千里の独自性がある。

「みえつる」も【語釈】に述べたとおり、秋に対する視覚的認識を表わしているが、この「視覚的」ということにこだわるのは、直接は表現されていないものの、秋の何らかの風物の推移を具体的に想定したうえでの表現でないと、全体に観念的に過ぎてしまうからである。「みゆ」に「つ」という助動詞が伴うのも、秋の推移を見続けてきた結果に対する「かなし」という感慨を示すためであろう。【補注】で示したように、その一首の構文から、当歌を見立て歌とすることも出来なくはない。見立てとすれば、本当は秋は悲しくないはずなのにという含意があることになる。千里がそこまでの意図をもっていたのならば、「悲秋」という漢詩の観念をそのまま受容したわけではないことが透けて見えることになるが、さすがに穿ちすぎかもしれない。

紅樹欲無蟬(紅樹に蟬無からむと欲す)

四四 もみぢつつ色くれなるにみゆる日はなくせみさへやなくはなりぬる

【通釈】

(木の葉の)色が変わって、色が紅に見える(今日の)日は、鳴く蟬までもがいなくなってしまうのだろうか。

【語釈】

もみぢつつ 「もみぢ」は「もみづ」という動詞の連用形で、葉が色づくことを表わす。本集には、紅葉を素材とする歌が、秋歌二二

首中の四首（他に、四一・四八・四九）しか見られない。古今集の秋部下の六五首中、「もみぢ（ば）」という語が出ているのだけでも二五首あるのに比べれば、非常に少ない。本集で「もみぢ」が動詞として使用されるのは、当歌のみであるが、「この里は継ぎて霜や置く夏の野に我が見し草はもみぢ（母美知）たりけり」（万葉集・十九・孝謙天皇・四二六八）、「天雲に雁ぞ鳴くなる高円の萩の下葉はもみぢ（毛美知）あへむかも」（万葉集・二十・中臣清麻呂・四二九六）など、万葉集から見られる。ただし、「つつ」を下接した例としては、「物ごとに秋ぞかなしきもみぢつつうつろひゆくをかぎりと思へば」（古今集・四・秋上・一八七）、「もみぢつつしぐれふりいでてゆく秋をみねの朝霧たちもとめなん」（陽成院歌合延喜十三年九月・四〇）など、古今集になつてから見られる。接続助詞「つつ」は、右の古今歌例のように、「もみぢ」ことと、「秋が」うつろひゆく」ことや「しぐれふりいでてゆく」ことが同時進行することを表わす。当歌の場合、「もみぢ」との同時進行を表わす動詞としては「みゆる」しか相当しないが、「みゆ」という動作に進行はなじまないし、「色くれなるにみゆる」のは「もみぢ」ことの結果である。この「つつ」は同時進行というよりも、「て」に近い順次性つまり緑の葉の色が変わつて赤になるということを示すものとしておく。

色くれなるに「色」は第三句「みゆる（見ゆる）」の主語で、色が紅に見えるという関係である。ただし、色単独ということはありえず、何の色かが問題になるが、初句の「もみぢ」の主語がないことと合わせ、それが木の葉であることが自明だからであろう。「色くれなるに」の句は、他に「たつた河色紅になりにけり山のもみぢぞ今はちるらし」（後撰集・七・秋下・四一三）がある程度。「くれなる」は、二八・四一番歌【語釈】該項を参照。

みゆる日は「日（ひ）」は、太陽の意でも昼間の意でもなく、秋の一日の意。その日は不特定ではなく、「もみぢつつ色くれなるにみゆる」ことを歌に詠んだ、まさにその時点としての日、つまり今日であろう。なお、「みゆる日」という表現は、鎌倉時代までは検索しえない。

なくせみさへや「なく（鳴く）」＋「せみ（蟬）」＋副助詞「さへ」＋係助詞「や」。「せみ」と「なく」との組み合わせはよくあるが、「なくせみ」という語順の例としては、「石走る瀧もどどろに鳴く蟬の（鳴蟬乃）声をし聞けば都し思ほゆ」（万葉集・十五・大石蓑麻呂・三六一七）、「さみだれてものおもふときはわがやどのなくせみさへにこころほそしや」（好忠集・五四一）、「なくせみもゆるほたるも身にしあればよるものぞ悲しかりける」（宇津保物語・まつりのつかひ三のみこ・二八八）などあるが、三代集の頃までは少ない。

蟬と紅葉の組み合わせは、三代集ころまでは見出しがたく、平安時代後期の「したもみぢひと葉づつちるこのしたにあきとおぼゆるせみのこゑかな」(詞花集・二・夏・相模・八〇)あたりから、「むらさめのあとこそ見えねやまのせみなけどもいまだもみぢせぬころ」(秋篠月清集・一一〇二)、「なく蟬も秋のひびきに声たてて色にみ山の宿の紅葉は」(拾遺愚草・二三三二)、「露さむく秋なく蟬の日ぐらしもあかずぞみつるやまの紅葉葉」(弘長百首・三四一)のような用例が見える。こうした三代集から平安時代後期、鎌倉時代にかけての変化は、歌に詠まれる蟬が、夏の蟬から秋の蟬(＝蛸)に変化したことに関わるであろう。この点については、二四番歌【語釈】「なきぬべらなる」の項および【補注】を参照。なお、本集には、当歌以外に「せみ」は二例あり、そのうち、二四番歌は夏歌、五五番歌は秋歌末尾にある。副助詞「さへ」は、蟬以外の、より秋らしい風物の大方も「なくはなりぬる」ことを含意する。その原因は秋の深まりに他ならない。係助詞「や」は普通、疑問を表わすが、【比較対照】に述べるように、純粹な疑問とはみなしがたい。いずれ鳴く蟬がいなくなることは疑問に感じるまでもないことだからである。

なくはなりぬる 「なし(無し)」+係助詞「は」+「なる(成る)」+助動詞「ぬ」で、(鳴く蟬が)いなくなってしまう、の意。「なく」が、第四句「なく」と、句頭で同音なのは、隣接する句にあつて、頭韻的な韻律上の効果を狙ったものだろう。本集には、他にも、「なくせみのこゑたかくのみきこゆるはあきすむむしの秋ぞしるらし」(千里集・五五)における第四句と結句の句頭の「あき」の反復に認められる(ただし本文の問題あり)が、音声上の修辭に乏しい本集では、珍しい配慮である。係助詞「は」は、「なくなる」の間に入り、その不在を強調する。この句は他に見出しがたいが、「なくなりぬ」は、「こひしともいまはおもはずたましひのあひみぬさきになくなりぬれば」(興風集・四〇)、「ありぬればつきなくなりぬをみなへしひとしれずこそをらむとはおもへ」(躬恒集・四七五)、「あきはつるをりもこはぎぞしられけるうへしたばともなくなりぬれば」(和泉式部続集・六一九)のように、少ないながらもある。

【補注】

当歌は、四二・四三番歌でも指摘したように、本集歌の特徴の一つである、第三句末の「は」を挟んでの題述構文であるが、次の二点で他とは異なる。

一つは、「は」が受ける提題部が主格ではなく連用修飾格であるという点であり、もう一つは、解説部に疑問の「や」があるという点である。前者は、何かが起きるといふ、その日が主題だからであり、後者は、起きることが現時点では未実現だからである。

全釈は、「木の葉の色がうつろい紅色にかわる（秋の）日は、鳴いていた蟬までもなくなるのだろうか」と訳す。これによれば、蟬がいなくなることでなく、木の葉の色が紅色に変わることも、ともに未来の事態とみなしているように受け取れる。それはつまり、その日がまだ訪れていないということでもある。しかし、それでは、一首全体があまりに茫漠としたものになるのではあるまいか。

古代語では、たとえば、「我が背子がやどの橘花を良み鳴くほととぎす（鳴鶴公鳥）見にそ我が来し」（万葉集・八・奄君諸立・一四八三）、「たつた河もみちば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」（古今集・五・秋下・二八四）の「鳴く」や「流る」のように、過去の助動詞を下接しなくても、その動作がすでに実現していることを示す用法もある。それに対して、未来（未実現）であることを明確に示すのは、「ぬばたまの今夜の雪にいざ濡れな明けむ（将開）朝に消なば惜しけむ」（万葉集・八・小治田東麻呂・一六四六）、「けふよりはいまこむ年のきのふをぞいつしかとのみまぢわたるべき」（古今集・四・秋上・壬生忠岑・一八三）などのように、助動詞「む」を伴う。

当歌は、少なくとも木の葉については、色付いた結果、紅く見えることは、その日の時点で実際に確認されたこととして示されているのであり、その日とはまさに今日ということである。ただし、歌においては、その日が暦日上の特定された日を指すわけではない。あくまでも詠み手がそれにたまたま気付いた日ということである。

気になるのは、原拠詩および句題との関係を考えることなく、秋の深まりの時期を詠む当歌に蟬を持ち出すことがありえたかという点である。

漢詩において蟬はもっぱら「寒蟬」の語で、『礼記』月令篇の孟秋に「涼風至、白露降、寒蟬鳴」をはじめ、秋盛りの風物として取り上げられるのに対して、和歌における「せみ」は夏の風物、ややずれてもせいぜい初秋までの風物である。「せみ」ではなく「ひぐらし」ならば、「秋の花咲きたる野辺にひぐらし」（日晩之）の鳴くなるなへに秋の風吹く」（万葉集・十・二二三）のように、明らかに秋歌に詠まれているものの、盛秋以降にまで及ぶとは考えられない。和歌表現史的に妥当なのは、たとえ上句の視覚と下句の聴覚という対比を意図したとしても、蟬ではなく秋の虫ではあるまいか。

【語釈】「なくせみさへや」の項に述べたように、当歌が秋の蟬を取り上げる先駆的な位置にあることは間違いないが、その先駆性は句題和歌という条件においてのみ可能だったと言えるよう。

なお、赤人集には「もみぢばのいろくれなぬにみえつるはなくせみのはやなくなりぬらん」（赤人集・六九）の本文で載る。

【比較対照】

原拠詩は、四二番歌と同様に、白氏文集の五言律詩「社日関路作」（卷第十三・〇六五四）であり、句題は領聯の第二句による。なお、本集底本の句題は「紅樹蟬鳴」という本文であるが、五言句としては字足らずであり、原拠詩により「紅樹欲無蟬」と校訂しておく。

晚景函関路 晚景の函関の路、

涼風社日天 涼風の社日の天。

青巖新有鴈 青巖に新たに鴈有り、

紅樹欲無蟬 紅樹に蟬無からむと欲す。

愁立駅楼上 愁へて立つ、駅楼の上、

厭行官俟前 行くを厭ふ、官俟の前。

蕭條秋興苦 蕭條たり、秋興の苦しみ、

漸近二毛年 漸く近し、二毛の年。

四二番歌の句題である尾聯第一句と比べれば、領聯の第二句のほうが秋の素材を含んでいる点で、秋歌の句題として採られやすかつたと見られる。本集における歌の配列を考えてみた場合、同じ原拠詩に基づきながら、四一番歌と四三番歌、四二番歌と四四番歌のように入り違っているのは、連続を避けたからかもしれない。

句題の「紅樹」には、当歌の上句、「欲無蟬」には下句が、内容的にほぼ対応する。表現として、歌に欠けているのは「紅樹」の「樹」相当の語であるが、「木の葉」さえも省かれているのであるから、あえて示すまでもないと判断されたのであろう。

歌に補われた主要な表現は、初句の「もみぢつつ」、第三句の「みゆる日」の二つである。「もみぢつつ」は時間的な経過を示すためであり、「みゆる日」の「日」はあるいは原拠詩の「社日」を意識してのことかもしれない。

細かい点としては、「欲無蟬」に対する「なくせみさへやなくはなりぬる」における「さへや」が挙げられよう。原拠詩の領聯では「新有鷹」と「欲無蟬」が到来と退去という点で対になっているが、当歌には蟬の対となるものはなく、その代りに、他にも退去の同類があることを含意するために「さへ」が加えられたのであるう。「や」については、純粋な疑問というよりは、婉曲化するための措辞と見られる。その婉曲化の背景には、句題をふまえながらも、本集五五番歌「なくせみのこゑたかくのみきこゆるはあきすむむしの秋ぞしるらし」の場合とは異なり、蟬に関する大幅な時期的なズレへの千里のためらいの気持が読み取れなくもない。

啼秋唧唧虫（秋に啼く、唧唧たる虫）

四五 あきのよをさむみなきつる虫のねはわがやどにこそあまたきこゆれ

【通釈】

秋の夜が寒いので鳴いている虫の音は、（他の家より寒い、独り寝の）私の家でこそたくさん聞こえるよ。

【語釈】

あきのよを いわゆるミ語法による表現の一部を成し、次句の「さむみ」と結び付き、秋の夜が寒いので、という意を表わす。「あきのよを……み」という表現は稀で、万葉集に「秋の夜を長み（秋夜乎奈我美）にかあらむなぞこば眠の寝らえぬも一人寝ればか」（万葉集・十五・三六八四）がある程度。ただ、本集には、「あきのよをさむみなきつゆかりのしもをしのぎてゆきかへるらん」（四九）のように、「あきのよをさむみ」を、虫ではなく雁の鳴き声と関係付ける歌がある。

さむみなきつる 初句の「あきのよは」から「さむみ」までが、続く「なきつる」の原因・理由を表わす。秋の虫が寒さが原因で鳴くとみなす用例は、古今集時代から、「秋はきぬいまやまがきのきりぎりすよなよななかも風のさむさに」（古今集・十・物名・四三二）、「風さむみなく秋虫の涙こそくさば色どるつゆとおくらめ」（後撰集・五・秋上・二六三、寛平御時后宮歌合・一〇三「風寒み啼く秋虫のなみだこそ草に色どる露とおくらめ」）、「ゆふさればこそふりたててきりぎりすつゆをさむみやよもすがらなく」（保明親王帯刀陣歌

合・よしみねのゆきから・三) など見られる。ただし、直接的に寒いのは風や露であることが多く、秋の夜と関連させる用例は、「きりぎりす夜さむになるをつげがほにまくらのもとにきつつなくなり」(山家集・四五五)、「よをさむみくさむらごになくむしのなみだややがてつゆとなるらむ」(行宗集・二三二) など、平安時代後期まで下らないとないようである。とはいえ、虫が鳴くのはたいいて夜であり、風や露を理由とするにしても、その背景にはそれらが発生する秋の夜がある。右に挙げた例からも知れるように、虫は「なく」、あるいは「なくなり」のように表現されるのが普通であって、当歌のように完了の助動詞「つ」を伴うのはきわめて珍しく、鎌倉時代まででは、「ねやちかくなきつる虫のあかつきはたれにならひてとほざかるらん」(前長門守時朝入京田舎打聞集・三) がある程度である。「霞立つ野の上のに行きしかばうぐひす鳴きつ」(鶯鳴都) 春になるらし」(万葉集・八・丹比真人乙麻呂・一四四三)、「雲の上に鳴きつる雁の(鳴都流鷹乃) 寒きなへ萩の下葉はもみちぬるかも」(万葉集・八・一五七五)、「かの方にはやこぎよせよ郭公道になきつと人にかたらん」(拾遺集・二・夏・紀貫之・一一五) などのように、鳥に関しては「なきつ」と詠まれるのと対照的である。この違いを、両者の鳴き方(聞こえ方) による、アスペクト的な区別(たとえば、虫は鳴き方の切れ目がないのに対して、鳥の鳴き声には切れ目がある、というような) に帰するのは難しいと思われる。むしろ、「平安時代に入って「つ」「ぬ」の原義が忘れられ、完了の意が次第に薄れて来て、「つ」「ぬ」の表現するところが確認へと移る」(『岩波古語辞典』) という見方をとれば、虫の鳴き声についても、それを確かに耳にしているという意味で、「なきつ」という表現を用いることはありえよう。「なく」という動詞には「つ」も「ぬ」も下接するが、「つ」のほうに人為的・作為的な傾向を認めるならば、虫の擬人化と関連させることもできるかもしれない。ただし、全訳は「秋の夜の寒さに泣き(たくなる頃) なく虫の音」のように、「なく」に人間が泣くことと虫が鳴くことを重ね合わせて訳しているが、歌全体はあくまでも秋の虫が中心なのであって、詠み手はその背後に位置すると捉えるほうが適切であろう。

虫のねは「虫のね(音)」は、万葉集には見られず、「わがために来る秋にしもあらなくに虫の音聞けば先ぞかなしき」(寛平御時后宮歌合・八三、古今集・四・秋上・一八六) が早い用例で、当歌もこれとほぼ同じ時期である。なお、是貞親王家歌合に、「しづはたにこひはすれどもこぬ人をまつむしのねぞあきはかなしき」(是貞親王家歌合・六六) がある。虫の音は、寛平御時后宮歌合歌や「むしのねになきまどはせるをみなへしをればたもとにきりのこりある」(亭子院女郎花合・三六)、「むしのねも心すごかるゆふぐれにうちふくかぜはいかがわびしき」(宰相中将君達春秋歌合・七五) のように、秋の悲しさやわびしさを感じさせ、またそれらを募らせるも

のとして詠まれる。

わがやどにこそ 「わが（我が）＋やど（宿）」は、私が住まう、あるいは所有する家屋敷のことをいい、庭も含まれる。当然ながら、虫の鳴き声は屋内ではなく、庭から聞こえてくるものである。係助詞「こそ」は、他の宿を想定して、「わがやど」を取り立て、強調する。【補注】【比較対照】を参照。

あまたきこゆれ その対象は、「虫の音」である。三代集時代までで、宿の虫の音の多さを詠んだものに、「草深みこほろぎさはに鳴くやど（蟋多鳴屋前）萩見に君はいつか来まさむ」（万葉集・十・二二七一）、「もみちばのちりてつもれるわがやどに誰を松虫こころなくらむ」（古今集・四・秋上・二〇三）などがあり、独り寝の状況を詠むという点で当歌と共通している。【補注】参照。

【補注】

当歌全体が成り立つ基盤となる因果関係として、虫は寒いから鳴く（A）↓寒ければ寒いほど虫は鳴く（B）という関係と、それを前提とした、我が宿は他の宿より寒さがまさる（C）↓虫の音が我が宿でたくさん聞こえる（D）という関係が設定されている。このうち、「……は……」という題述構文によって表現されているのは、題目としての、最初のAと、その解説としての、最後のDの二つのみであり、両者をつなぐ、Aの結果としてのB、Dの原因としてのCの二つが省かれている。それらを想定し関連付けることによってはじめて、当歌の解釈が可能になるのであるが、そのような想定は、【語釈】「あまたきこゆれ」の項に挙げた類例を見ても、比較的容易だったのではないかと思われる。

じつは、これらの関係には、隠された、もう一つの必要な、そして当歌にとって重要な要素がある。それはCがなぜ成り立つのか、その原因である。

我が身の寒さの多くは、秋の夜寒に加えて、「もみち葉を散らすしぐれの降るなへに夜さへそ寒き（寒）一人し寝れば」（万葉集・十・二二三七）、「秋風の身にさむければつれもなき人をぞたのむくるる夜ごと」（古今集・十二・恋二・素性・五五五）、「はださむくかぜはよごとになりまさる我が見し人はおとづれもせず」（好忠集・二二三三、毎月集・秋）などのように、独り寝の状況があつてこそである。しかも、もとから独身というわけではなく、恋の相手とその夜、いないゆえの独り寝なのである。

当歌が秋という季節の歌であること、それが悲秋という捉え方と結び付けられることに、何の問題もない。ただし、八代集にあって

も、部立上は季節歌と恋歌に区別されてはいても、どちらともとりうる歌はけっして珍しくはない。たとえば、本集においても、秋部の三四番歌や三八番歌のような七夕歌などは、恋歌そのものと言えよう。

なお、赤人集七〇番歌にも、同文で載る。

【比較対照】

底本は、歌本文の前一行が空白になっている。藏中校本によれば、流布本系諸伝本はすべて句題を欠く。本集自体の成り立ちから考えて、これを誤脱と見て、異本系統書陵部藏桂宮本で句題を補う。原拠詩は、白氏文集の五言律詩「江夜舟行」（卷第十五・〇八七三）であり、句題はその頸聯の第二句による。

煙澹月濛濛 煙澹みはくして、月濛濛たり、

舟行夜色中 舟行す、夜色の中。

江鋪満槽水 江は満槽の水を鋪しき、

帆展半檣風 帆は半檣の風に展のぶ。

叫曙嗷嗷鴈 曙に叫ぶ、嗷嗷がうがうたる鴈、

啼秋唧唧虫 秋に啼く、唧唧しよくしよくたる虫。

只応催北客 只まよ応に北客を催し、

早作白鬚翁 早く白鬚の翁と作なすなるべし。

頸聯には「鴈」と「虫」という、典型的な秋の景物が詠まれているが、「秋」を明示することから、第二句のほうが採られたかと思われる。

「唧唧」という疊字は、蟋蟀（コオロギ）そのものを表わす場合もあるが、雁に関する「嗷嗷」という疊字とともに、もとはその鳴き声のオノマトペであろう。ただし、それがどのような鳴き声なのかは、定かではない。当歌の「あまたきこゆれ」という表現から逆

に推測すれば、しきりに、あるいは数多く鳴くさまを表わしていることになる。

表現上の対応関係としては、「啼」に「なき」、「秋」に「あき」、「唧唧」には右記のとおり、「虫」には「虫」のように、句題の語すべてに見合う表現が歌に認められる。歌で補われた主な表現は、「よをさむみ」と「わがやどにこそ」であるが、前者は秋の夜と虫の声を関係付けることとして、一般に漢詩にも和歌にも取り上げられるのに対して、後者は原拠詩の設定と明らかに異なる。詩では「江夜舟行」という題の示すように、旅先だからである。それをなぜ、わざわざ「わがやど」に置き換えたのか。

考えられるのは次の二点である。第一点は、旅先という非日常ではなく、自宅という日常のリアリテイを優先したのではないかということ、第二点は、そのうえで詠み手と虫との重ね合わせを意図したのではないかということである。

原拠詩は、いわば旅愁であり、虫も含めた、旅先の景物はそれを喚起するものとして詠まれているのに対して、当歌は【補注】に述べたように、虫は詠み手が感情移入する対象として詠まれている。

八代集には、「わがやど」という表現が一〇四首に見られ、「やど」全体の三分の一弱に当たる。とくに「わが」を冠する場合の特徴の一つとして、その「やど」は、万葉集におけるような、単なる所在の指定ではなく、他から特別扱いする点が挙げられる（半沢幹一「宿」論『古代歌謡表現史』笠間書院、二〇二二年 参照）。

当歌も、虫の鳴く実態はともかくとして、他の宿に比べて「あまた」と聞こえてしまうような、詠み手自身の特別な状況を示そうとしたと考えられる。その特別な状況とは、恋の相手の不在である。とすると、当時の恋愛・婚姻形態からは、女の立場による歌になりそうであるが、それにこだわる必要はあるまい。ついでに言えば、他の宿は誰かと一緒であるのに対してという、比較を考えるにも及ばないであろう。要は、詠み手自身にとって日常的な状況が非日常になっているせいで、「あまたきこゆれ」ということである。

全釈の「補説」には、この点から、「原拠詩の世界とは別箇に和歌は作られていると知られる。翻訳を指してはいないことが明白である。」とわざわざ記してある。そのとおりなのではあるが、それは本釈論で繰り返し指摘してきたように、当歌に限ったことではない。

むしろ問うべきは、句題からのずらし方にあるのであって、当歌においては、千里の「月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」（古今集・四・秋上・一九三）に典型的に見られるような、詠み手個人に引き付けた歌いふりに変換する傾向に

こそ注目すべきであろう。それはたとえば、本集五四番歌、「寒雁声静客愁至」という句題に対する「なくかりのこゑだにたえてきこえねばたびなるひとを思まさりぬ」において、なぜ「たびなる人は」ではなく「たびなる人を」としたのかという問題にもつながる。